ペルー社会イメージの一系譜
——18 世紀副王領時代のリマ——

前　田　伸　人

A Genealogy of an Image of Peruvian Society: Lima in the 18th Century's Viceroyal Peru

MAEDA Nobuhito

We are usually accustomed to considering Peru as a branch of Inca empire. Peru may be, however, called on the other hand an entity that has cultural and mental vestige of the Spanish viceregal epoch. Its most popular example is the episode about the *liaison dangereuse* between viceroy Amat and actress Perricholi. In this article, the author will treat and analyze this reiterative and ever-lasting memorable affair under discussion. In the first place, it will be revealed that the French liberal and romantic novelist Prosper Mérimée is the first to drama and spread that affair, absorbing and digesting the naval journal described by an English naval officer Basil Hall. Secondly, it will be shown that a French Max Radiguet, being of conservative trait, focused his attention on the aspect of Perricholi's conversion. Thirdly, it will be indicated that Ricardo Palma, Peruvian novelist, synthesized and integrated the affair of the viceroy and his concubine and the Peruvian past, absorbing the sight of the New World offered by the Westerners or Western eyes. Jean Renoir's *Le Carrosse d'or* may be called a recurrent version of a Peruvian colonial image.

キーワード：ペルー副王領、アマット副王、ペリチョリ、伝説集、メリメ

1.　はじめに

1.1.　問題の所在

本稿は、南米に位置するペルーに関わる定型的な複数のイメージから、一つを取り挙げ、それがどのように形成され、どのように反復されていったか、その系譜を論考するものである。ここで扱うイメージとは、18 世紀ペルー副王領の中心地リマを舞台にして展開された、副王アマットと舞台女優ミカエラ・ビリェガス（別名ペリチョリ）との醜聞である。それが多様なペルーイメージの一つとして確立していくのである。

私たちがペルーに抱くイメージといえば、マチュピチュに代表されるようなアンデス山脈と先住民であろう。あるいはもう少し広く、インカ帝国や先インカ期の建築物、文物を浮かべるかもしれない。こうしたイメージの源泉はどこにあるのだろうか。大雑把に言えば、17 世紀初頭に刊行されたインカ・ガルシラーソの『インカ皇統紀』にあろう。そしてそれよりも影響度が小さいが、文章に加えて絵画が溢れるワマン・ポマ・デ・アヤラの『最初の新しい年代記と良き統治』も加えられよう。父をスペイン人に母をインカの皇族に持つガルシラーソが執筆した『インカ皇統紀』は、ルネサンス期の世界観や学問観に即してインカ帝国の社会構造と歴史とを記述しており、欧州の読者の関心や視線を巧みに考慮しているので、彼らの探求欲を納得させる内容になっていた。もちろん、そのインカ像は実際の姿とは距離があったのだが。そして現在に至るまでのペルーの印象を決定しているのである。

19 世紀以降、ペルーの過去に対するイメージ形成には、三つの政治的な動き、つまり自由主義、保守主義、ナショナリズムが大いに関わっている。このような政治的姿勢の分岐を理解するには、同じく 19 世紀に独立して共和政になったメキシコの情勢が一助になる。例えば、自由主義派は代表的な人物にホセ・マリア・ルイス・モラがいるが、彼はスペイン植民地体制の遺産である、政治的・経済的な面で規制の強い法制や教会支配を排撃しようとし、専制体制に隷属しない自立した個人の創設を構想している。それに伴い先住民の保護も止める方向に進んだ。一方、保守派はルーカ

ス・アラマンを軸にして動いた。この集団は穏健自由主義を掲げ、ある程度秩序が維持された 18 世紀のスペイン統治体制をモデルにしていた。中央集権主義的な秩序のある体制を良しとしたのである。しかも、アラマンは銀鉱山で有名なグアナフアトにある鉱山主の出身で、「ドローレスの叫び」で独立の狼煙を上げたイダルゴやモレーロスによる虐殺に遭遇したことが彼の政治的な姿勢を決定づけたのかもしれない。三つ目にはナショナリズム派としてテレサ・デ・ミエル師がいる。彼は、先住民がコロンブス以前にキリスト教布教を受けてすでにキリスト教徒になっていたとする、先住民の神話とキリスト教の伝承とを混淆した考え方を打ち出し、スペイン人による征服を是とせず、先住民の権利を重視した。もちろん、それだけでは不十分だったから、のち 20 世紀にインディヘニスモという別の先住民主義が登場する。

ペルーに関してもメキシコの例に基づいて、文化観と国のイメージを腑分けすることができるが、先に挙げた二人の先住民に源流を持った、文化イメージが際立って先行している。しかし、それだけが唯一のイメージではない。独立後の 19 世紀の情勢を瞥見するだけでも、植民地時代の遺産を否定するヨーロッパ一辺倒の自由主義的な姿勢もあれば、一定程度スペインの遺産を継承する立場もある。本稿はこの後者の、スペインの遺産を重視するイメージの系譜を追跡することになる。その際、同時期の欧州も情勢にも触れるつもりである。

1.2. 書誌、研究史と章立て

本稿で俎上に載せるのは、18 世紀リマを揺るがした副王アマットと舞台女優ペリチョリことミカエラ・ビリェガスとの身分を越えた醜聞である。その伝承を『ペルー伝説集』の中で伝えたのが、ペルーの文人リカルド・パルマである。同時に、彼がその流言を取り挙げたのも、ヨーロッパ人の旅行記や小説等を通じて醜聞が予め流布されていたから、その視線を吸収し、同時に独自性を出そうとしたのである。話題の二人がどのように記述され、描写されてきたかその系譜を追って叙述、分析するのが本稿である。

醜聞の発祥地ペルーの文人リカルド・パルマが書いた『ペルー伝説集』にはいくつかの版がある。六巻本の全集は、スペインで三度発行されている。その他、メキシコのポルーア叢書には、代表的な伝承を収録した選集がある。二人の醜聞もここに収録されている。さらに、カテドラ出版社からのレトラス・イスパニカス叢書の一つにも選集がある。本稿では、ポルーア版を使用する。

第一次アンデス調査隊に参加した寺田和夫が帰国後執筆したのが、『アンデス教養旅行』である。この中には、本職の発掘記事のほか、リマの案内も書かれており、リカルド・パルマを引きつつ、聖人のサンタ・ロサや、本稿でも扱うペリチョリの挿話を巧みな筆致で紹介している。

戯曲を通じてこの醜聞を取り挙げたのが、フランスの作家プロスペル・メリメであった。戯曲集『クララ・ガスル』の中に収録されている『サン・サクルマンの四輪馬車』である。それにはガリマール版、ガルニエ版等がある。メリメの邦訳は、第二次世界大戦前と大戦後にそれぞれ「全集」が出版されている。重複する作品も一部あるが、一回しか訳されていないものも多い。『サン・サクルマンの四輪馬車』は戦前に訳されただけである。

ペルーに実際赴いて醜聞を耳にした航海者としては、バジル・ホールがいる。その孫が日本学で有名なバジル・ホール・チェンバレンである。ホールは海軍士官として中南米に派遣されてメキシコのサンブラス岬からペルー、ブラジルに至る中南米沿岸を測量した。その結果、1824 年に『1820、1821、1822 年におけるチリ、ペルー、メキシコ沿岸に関して書かれた日誌からの抜粋』を公刊している。

また、フランスの旅行者マックス・ラディゲは 1841 から 1845 年にかけて中南米各地を旅行した。のちにその成果を『両世界評論』に発表したうえで改めて 1856 年『スペイン領アメリカの思い出：チリ、ペルー、ブラジル』を発刊している。

メリメに関する研究書は多数ある。今回のテーマに関連して注目すべきは、『サン・サクルマンの四輪馬車』のニュース・ソースに関する研究である。一つは 1972 年に出版されたヘインズワースによる『サン・サクルマ

ンの四輪馬車を巡って：バジル・ホール、ラ・アラウカナと航海記』である。もう一つが第二次世界大戦中の 1940 年、ハリ・マイヤーによる『メリメの解釈 1： サン・サクルマンの四輪馬車』であろう。

以上を踏まえて、章立ては次のように構成される。第 2 章は事件の発生する背景となる、18 世紀ペルー副王領の情勢と変化を記述する。第 3 章では、プロスペル・メリメの戯曲『サン・サクルマンの四輪馬車』を扱う。その情報源に明らかにし、戯曲の特色を論ずる。それに関連して、南米を旅行したフランス人ラディゲの旅行記にみる、ペルー記述の特徴を論ずる。続いて、第 4 章では、ペルーの文筆家リカルド・パルマに焦点を当て、以上に挙げた著作と引き比べながら、自らの『伝説集』で醜聞をどのように記述しているかを明らかにする。第 5 章では、20 世紀のフランス映画の巨匠の一人ルノワールが作製した映画に簡単に触れたうえで、ペルーイメージの系譜をまとめることにする。

2. 十八世紀ペルー副王領の内情

2.1. ペルー副王領の分割と改革

スペインは 16 世紀に新大陸を掌中に収めると、北米・中米にヌエバ・エスパーニャ副王領を設置し、メキシコ・シティーに国王代理である副王を派遣して同地を統治させた。一方、南米にはペルー副王領を設け、「王の都」の別名を持つリマ市に都を置いた。ペルー副王領は、さらに三つの行政区に分割された。リマ、キトそしてチュキサカ（コチャバンバ）であり、それぞれにアウディエンシアという行政と司法を兼備した機関が置かれた。

18 世紀、スペインではそれまでのハプスブルク家が断絶して、フランス系のブルボン朝が君臨し、中央集権制に特徴づけられるフランス式の諸制度が導入された。顧問会議制度が省庁制になって国王の意向が強くなり、アカデミーの設置に明白なように学問が制度化され、軍事力の強化、重商主義的な産業の育成と帝国内自由貿易の振興が進んだ。さらに、従来の行政区域を変更してインテンデンテ（監察官）を置く、インテンデンテ制が

時間をかけて推進された。ここでは、独立採算制を旨として軍事力を維持できる税収を確保できるような行政区域の線引きが構想された。

このような政策がペルー副王領にも徐々に浸透し、その内実を変えていった。とりわけ、劇的な変化を与えたのは、1778 年、ペルー副王領から分れて、現在のアルゼンチン、チリ、パラグアイ、ボリビアを包括するラ・プラタ副王領が新しく成立したことであった。この原因には二つあるとされる。一つは、現在のアルゼンチン地域でポルトガルの進出が頻発し、これを追い返してスペイン側からの反撃を可能にするためであった。従来、この地域はペルー副王領の末端に位置しており、仮に紛争が発生してもリマ府からの訓令を得るのに時間がかかる上に、十分な軍費が割り当てられていないため有効な反撃ができなかったからである（Fisher, 1970: 4–5）。それゆえ、新しい副王領を設けた際、鉱山地域のポトシを含む高ペルー地域を編入させることで軍事行動ができる歳入増大の措置を図った（Fisher, 1970: 5）。また、もう一つの理由は、従来のリマ経由の交易路を利用することを止め、ブエノスアイレスから直接大西洋に乗り出して貿易の拡大をラ・プラタ地域自身が望んだからであるとされる（Fisher, 1970: 5）。

行政区域の変更による影響は実に甚大であった。新設されたラ・プラタ副王領では、ブエノスアイレスの経済的な力が大きく拡大した。しかし、同じ副王領内でも内陸の拠点だったサルタやトゥクマンは、もともとペルーのアレキパやクスコと経済的紐帯が強かったので、今回の措置で衰退に瀕してブエノスアイレスに従属する羽目になった（Fisher, 1970: 5）。一方、縮小したペルー副王領にしても、ドル箱であったポトシ銀山を喪失したことだけでなく、より安いブラジル産のサトウキビが流入したためにラ・プラタ地域を市場としたサトウキビ産業が衰退した（Fisher, 1970: 5–6）。こうして、ペルー副王領の凋落が顕在化したのである。

2.2.　アマット副王のペルー副王領

本稿で扱うカタルーニャ系のアマット副王（1762–1776）は、この劇的な改革以前の時代にペルーを統治した。それゆえ、旧体制と妥協する面を持つ一方で、旧体制の悪弊に挑戦する面をも持つ、過渡的な時代を生きた副

王でもあった。

実際、副王府のリマでは貴族と商人は互いに通婚して同市の支配層を形成し、その力は侮れなかった。そこで、この面では妥協を余儀なくされたし、 新政策であるインテンデンテ制度の導入にも慎重であったようだ（Fisher, 1970: 7）。

それに対し、 地方にあるコレヒドール職（代官職）の売却を通じて歳入の増大を図った（Fisher, 1970: 10）。さらに、スペイン産の製品を先住民に強制的に買わせるという、レパルティミエント制度のありようにはメスを入れようとした（Fisher, 1970: 15）。それが原因で先住民の反乱が頻発しているのである。事実、彼の就任以前にもレパルティミエントの圧政に堪えかねて、先住民の長フアン・サントス・アタワルパの乱（1742–1756）がタルマやハウハ地方で勃発したし、 就任中にも同様な乱が起こっている（Fisher, 1970: 14）。アマット自身、70 年代前半に起こった反乱の報告書を提出しているほどである（Fisher, 1970: 15）。彼の帰任後も、トゥパック・アマル―の乱が 1780 年に発生している。

アマット副王はそのほか、 ミタ制度にもメスを入れようとした（Fisher, 1970: 16）。この制度は、先住民の強制労働制度を指し、ポトシ銀山や大農園、 オブラヘ（繊維工場）、 コカ農園、 サトウキビ農園等で働かせる制度だった。

ペルー副王領の改革には、 アントニオ・ウリョアやホルヘ・フアンの「秘密報告書」に基づいている。2 人は 10 年間ペルーの地で、フランス科学者と協力して緯度 1 度の長さを測定して地球が南北よりは東西に長い回転楕円体であることを実証する事業に従事した。それとともに、ペルー副王領の政治・経済・社会に関する情報収集とその分析を行った（Fisher, 1970: 9）。そのあと、 ホセ・デ・ガルベスがヌエバ・エスパーニャ副王領を見分し、 部下のアレチェをペルー副王領に派遣して改革を進めた（Fisher, 1970: 12）。

3.　プロスペル・メリメの描く中南米

3.1.　メリメの生涯

ここからは、いよいよ 18 世紀のペルー副王府リマを騒がせた恋愛事件の張本人に焦点を当てた各種の記述に目を向けていこう。事件の主人公は、カタルーニャ出身の副王マヌエル・アマットである。チリの総督を歴任した後、副王に就任した。当時 60 歳代であった。一方、お相手は舞台女優のミカエラ・ビリェガスで、第一次東大アンデス発掘隊の発掘地であったコトシュの近郊ワヌコで生まれたとされる（寺田、1962、150–151 頁）。ペリチョリというのが渾名である。なぜこんな渾名を持ったのだろうか。侮蔑語で時に愛称語でもあった「雌犬」を表現する“ペラ”Perra と、白人と先住民の混血女を表す“チョラ”Chola とを合わせて“ペラ・チョラ”Perra Chola と呼ぶつもりが、歯の抜けていた副王が思わず“ペリチョリ”Perricholi と呼んでしまい、人口に膾炙したのがこの呼び名らしい（Palma, 1986: 162）。

この二人の醜聞を大きく戯曲『サン・サクルマンの四輪馬車』に仕立て上げたのがフランスの作家プロスペル・メリメであった。メリメは 19 世紀に活躍した小説家である。文学的な流派からすれば、ロマン主義派の作家と言えよう。現在の日本では、セビーリャが舞台となる『カルメン』、『タマンゴ』、『エトルリアの壺』あたりが何度となく版を重ねているが、どれも短編である。総じて現在では余り関心を引く作家とは言えないだろう。

しかしながら、彼の作品を博猟すると、ロマン主義の作家の関心と視野に違わず、各地域に広く関心を向けている。その中でも、スペイン語圏への関心がとても強く、それを舞台にした小説、戯曲のみならず史伝すら書いている。実際、14 世紀王位を巡って弟エンリケと争い、ついにはその弟に敗れたペドロ王の伝記を著している（メリメ、1977、5–352 頁）。このペドロは、“残酷王”と“公正王”の渾名を兼備した中世カスティーリャ王国の王であり、英仏百年戦争にも関与している王である。同書にエドワード黒太子について記した章を見ることができる。その他にも、新世界を舞台した小説も書いている。

彼はまた作品以外の面でも、スペインの自由主義者に対する連帯があったし、スペイン出身のモンティーホ家と親しかったので、その家の出身であるウジェーヌを妃としたナポレオン三世とも交友があった。ラテンアメリカの進出を狙ってそのナポレオンがメキシコ皇帝にハプスブルク家出身のマキシミリアンをメキシコ皇帝に担いだことがあった。そのため、メリメも“メキシコ帝国”に目が向き、同国皇妃でベルギー王家の出身であるカルロッタ（シャルロッテ）との交遊もあったようだ。

3.2. メリメの戯曲と政治的背景

さて、ペルーの醜聞に着想を得た『サン・サクルマンの四輪馬車』に戻ろう。この書には邦訳がある。第二次世界大戦前、河出書房から出版されたメリメ全集の第 5 巻に収録されている。今日出海・斎藤正直が共訳している（メリメ、1939、1–60 頁）。なお、今日出海は『お吟さま』の著者として有名な今東光の弟である。

この戯曲は、フランス語版では『クララ・ガスル』と題する戯曲集の初版（1825 年）には収録されていないが、1830 年の版には、キューバを舞台にした作品とともに収録されている（Mérimée, 1928: xvi）。ここで寄り道をして『クララ・ガスル』について触れておこう。その名を持つ、踊りをよくする女性が演じた戯曲集が反動勢力により禁書目録に入れられたので、英国にいるクララに目を通して貰ってフランス語に訳したという触れ込みで、メリメ自身わざわざジョゼフ・レストランジュなる変名を用いて刊行している（Mérimée, 1928: 4–5）。

19 世紀初頭のスペインの情勢をかいつまんでおこう。1808 年、ナポレオンの軍隊がイベリア半島に侵入すると、ブルボン家の王は廃位されてしまう。代わりにナポレオンの兄ジョゼフが新たなスペイン王として即位する。自由主義派であるがジョゼフに与しえない一派が南部の港町カディスに籠城して 1812 年、自由主義的性格の強いカディス憲法を制定した。ナポレオンが凋落し、フェルナンド七世の復辟が実現する。しかし、絶対主義的な姿勢で抑圧する政治を行った。そのため、スペインを出国する亡命者が急増した。1820 年、ラ・プラタ地域の独立運動鎮圧に派遣される筈の軍

隊がカディスで反乱を起こした。その首魁はリエゴで、フェルナンドに迫ってカディス憲法を復活させ、3 年間にわたる自由主義者の政治運営を実現した。しかし、自由主義者同士の内紛で政権は瓦解し、フェルナンドが再び自由主義者をより厳しく弾圧した。これに伴い、再び亡命者が増加することになる。

『クララ・ガスル』の冒頭はこのようなスペインの政治的変動を念頭に置いて読むべきである。それを読むと次のようにまとめられる。クララなる女性は、イベリア半島を蹂躙したナポレオン一世軍に父親が捕らえられて処刑されたために孤児となり、カトリックの聖職者に育てられる。しかし、読書しようにも祈祷書しか許されず、外出も制限されたのでやがて恋人と駆け落ちした。その後、カディスで踊り子として非常に人気を博した。1820 年このカディスで自由主義者の反乱が起こったあと、彼女のサロンは自由主義者の溜まり場だった。もっとも、反自由主義派にも人気があったとされる（Mérimée, 1928: 1–4）。

リエゴの反乱が鎮圧され、スペインでは絶対主義の復活が見られて教会勢力が大きくなり、自由主義者とその憲法が抑圧された。それゆえ、隣国に政治的亡命する人々が増加した。それでは、隣国フランスの状況はどうであったろうか。ナポレオン失脚後、フランスもフランス革命前の秩序に回帰するという正統主義の名の下、ここでもブルボン朝が王政復古して反動政治を推進した。ルイ 18 世期は、シャトーブリアン外相の提唱でスペインに派兵し、先の自由主義派の政権を崩壊させた。その死後、1824 年に即位したシャルル 10 世は王党派よりも王党派的と言われたユルトラ派の総帥とも言える人物であった。その中で教会とコングレガシオンと呼ばれる修道会が猛威を振るったようだ（Mérimée, 1928: vi）。その中で、メリメはキリスト教会や反自由主義派を揶揄しているから先の戯曲も仮名で発表したし、『サン・サクルマンの四輪馬車』発表の際も、彼に猜疑の目を向ける人物が吐いた言葉は、「メリメは私が会ったことのないような唯一の反教権主義者だ。味覚にうるさいのか、司祭ではなくして司教ばかりを食べたがった」という（Mérimée, 1928: 306）。メリメの反教会派的姿勢を言い当てている。

3.3. メリメの情報源となったバジル・ホール

さて、メリメはペルーの醜聞をどこから得たのだろうか。『サン・サクルマンの四輪馬車』の別の版を編集した人物にピエール・トラアール Pierre Trahard がいる。彼は広くメリメの作品に目を通したが結局わからずじまいで、メリメの友人の一人で南米に渡航したことのある友人ルランから聞いたのではないかと根拠もなく推測したようだ（Hainesworth, 1972: 141）。

因みに、このルランとは、科学使節として派遣されたブサンゴーに同行して、新生グラン・コロンビアに赴いたフランソワ・デジレ・ルラン François Désiré Roulin である（Päpßler, 2015: 16–17）。トラアールはこの使節にペルー出身のマリアノ・デ・リベロが同行していたことも念頭に入れたかどうかは定かでない。

ヘインズワースの研究に拠ると、ルラン説を採用せず、1821 年ころに、中南米に回航していたバジル・ホール提督の航海記が情報源であるとし、メリメは英語にも慣れていたこともさることながら、英語から訳したフランス語版があり、この翻訳に依拠したと主張する（Hainsworth, 1972: 142–144）。ガリマール版でもこの説を採用する（Mérimée, 1978: 1202–1203）。

ただ、ここで不思議なことがある。実は第二次世界大戦中、ドイツにおいてドイツ語で書かれたメリメの研究小論がある（Meier, 1940: 412–414）。そこでは、アマット・ペリチョリの醜聞の源泉をバジル・ホールにあると推測していること、更には、戯曲にも出てくるマテ茶の記述にも着目している。この研究にガリマール版が触れていないのは、大戦中であったとはいえ、やや不思議なことである。マテ茶の事は、フンボルトの友人であるボンプランの可能性はなかったかということも気になる。

以上を踏まえて、ホールの記事に着目しよう。彼は、日本学の第一人者として知られるチェンバレンの祖父にあたる人物である。海軍の軍人で、スペインで戦ったほか、アマースト公使に同行して清にも渡った経験がある。それ以後は、中南米でメキシコ、ブラジル、ペルー、チリなどで観測事業を続けたほか、同地域の独立情報の収集にあたった。

彼の航海記を見ると、1821 年 7 月 21 日の分にリマの記述がある。次の

ようにまとめられよう。静かな夜分、突然鐘が鳴って馬車が出てきて、それに乗って聖職者が派遣されて聖体拝領に向かうのをたまたまチェンバレンは目撃した。その後、馬車の由来がアマット副王とペリチョリの醜聞にあったことを知人から聞いている。それによると、愛人のペリチョリは、家宅を与えられるだけでなく、四輪の馬車を欲しがり、それに乗ってリマの町を観覧しようとした。しかし、単独で走行すれば群衆にもみくちゃにされ落命しかねないので、まずは副王が乗った馬車が先行し、後ろが見える窓を新調して後方を伺いながら、ペリチョリの馬車を従わせるという措置を取った。この茶番にリマ市民は興奮した。しかし、教会の前に到着すると、ペリチョリはそれを乗り捨て、教会に寄進して臨終の秘跡を行う際の馬車として役立てて貰った話を聞いた由である（Hall, 1824: 235–239）。彼女の回心ぶりが理解できる個所である。

3.4. 『サン・サクルマンの四輪馬車』の展開

では、メリメの『サン・サクルマンの四輪馬車』ではどうなっているだろうか。メリメの作品では、副王はアンドレス・デ・リベラ、女優はペリチョリである。なお、邦訳ではペリコールとなっている。次のような筋にまとめられる。祭礼のためリマ市民の前に登場しなければならないが、副王は痛風のため気が進まない。チュキサカ（コチャバンバ）地方の反乱にどう対処すべきか侍臣からの問いにも上の空のまま、ペリチョリが他の男に心を移している噂に心を痛める。そこに突然、ペリチョリ本人が闖入してくる。副王は浮気をなじるのだが、闘牛士にしろ、アギーレの件にしろ、うまく丸め込まれてしまう。さらには、スペイン本国から到着した四輪馬車を女優に与えてしまう。ペリチョリはそれに乗ってリマの市中を駆け出した。結婚前は仕立て屋の娘でしかなかったアルタミラ伯爵夫人に対抗意識を剥き出しにして、夫人の馬車を後ろから追い越した上に衝突させて転覆させた。ペリチョリに文句を言おうとすると、闘牛士が加勢して伯爵の一行を殴り倒す始末であった。この一切合切を学士エスキベルが副王に知らせたので、副王は離任の際に悪い評判が立たないように学士に口止めして、現場に向かおうとした。すると、突如リマ大司教とペリチョリが副王

を訪れる。大司教が恭しく女優を扱っているので、不思議に思っていると事情が判明する。ペリチョリは教会の前で聖職者の姿に感銘を受け、馬車を寄進して最後の聖体拝領の際に聖職者を運ぶ車として寄進したことが明らかになって大団円を迎えたというものだ（Mérimée, 1978: 217–247; メリメ、1939、1–60 頁）。

ここでは、副王、アギーレ大尉、闘牛士ラモンの三人が女優のペリチョリを巡って争う。身分秩序を攪乱しているため、貴族や大商人が支配層であるリマの住民の神経を逆撫でする。身分の卑しい女優が回心する。フランスに置き換えれば、身分秩序の専断、政治に容喙しすぎる教会への皮肉、絶対主義への批判へと繋がるのでメリメが白眼視されたのだろう。

3.5. フランス人旅行者マックス・ラディゲによる叙述

マックス・ラディゲは、1841 年から 1845 年にかけて、ペルー、当時まだ海港を持っていたボリビア、ブラジルの各国を訪問している。旅行記は当初『両世界誌』に掲載したのち、1856 年に以前省略した部分をも収録して書籍として公刊した。『スペイン領アメリカの思い出：チリ、ペルー、ブラジル』という題名が付いている。彼が最もページを割いているのは、リマの名所旧跡や習慣、風俗である。それに比べると、ボリビアの海港、ブラジルの首都リオ・デ・ジャネイロ、中南米独立後の情勢に関する記述は少ない。

回想録の序文を読むと、彼の叙述動機を知ることができる。次のような内容である。交通の発達で人々の往来が多くなるが、実利的な旅行者、つまり商人が多い。彼らは、数字と数字で表示される世界を好む。それゆえ、古い歴史、旧跡、風俗習慣には興味を持たないと難じている。中南米諸国の多くが過去を否定しているのに対し、欧州の最新の流行を入れながらも、依然と旧跡や古い習俗を残しているのはペルーであり、就中その首都リマに惹かれている。そこにはペリチョリの伝承もあれば、黒人奴隷の信徒会の言及などがあるとしている（Radiguet, 1856–: xvi–xxv）。

序文にあるペリチョリが言及されているのは、「劇場、民衆の祭礼、宗教的・政治的な習慣」と題する第二巻の第三節である。それに目を向けてみ

よう。旧アラメダ街の入り口には、ペリチョリの家がありその近くにもアマット副王時代に建設された女性の浴場に充当された建物があり、水路が通され滝と貯水池があるという構造だった（Radiguet, 1856: 132–133）。そのあと、副王と浮名を流したペリチョリに関する伝承が書かれている。

ペリチョリは、1760 年ころに舞台デビューした。当時のペルー副王アマットはかなりの年齢を重ねていたが、若い彼女に心を奪われ、気を引こうと彼女に富をつぎ込んで浪費を繰り返した。彼女は混血の出身であり、階層的には侮蔑を受ける立場にあったから、それを晴らそうとする行動をしばしば取った。夜分二人で馬車に乗ってリマを周回した時、彼女は喉が渇いたからと言って部屋着のままの副王を下ろしてマヨール広場に向かわせて噴水から水を汲ませることがあった。また、別の機会には。お気に入りの雌ラバが飼料を食べていないのではないかと疑い、髪の毛が逆立つほどに怒りを示して高飛車な態度に出た。この時もまた、アマットは宮殿の厩舎に赴いて馬丁たちの勤務状況を確かめさせた。他にも彼女は貧しい人々に対する慈善事業を副王に促していたようだ（Radiguet, 1856: 133–134）。

副王、大貴族やスペイン貴族すべてが行列を組んで姿を現し、その華麗ぶりを誇示するはずの式典の日が近づくにつれ、得意げな考えがペリチョリの頭をよぎった。その機会を利用すれば、さらに征服者たちの敏感な自己愛を苦しませ、今度の式典で彼らよりも優位に立てると考えた。そこで彼女は直ちに副王の傍らで文句のないようなおべっかを使って馬車に載せてもらう好意を得ようとしたようだ（Radiguet, 1986: 133–134）。

しかし、この度は気紛れが嵐のような騒ぎを引き起こした。それが噂になって広まり、貴族層に広く抗議の声が上がった。赤褐色の肌、混血女（チョリータ）、この死すべき人々の娘である彼女が、青い血を持つ貴族階級の上に君臨するのではないか、と。そのような侮辱を受けるくらいなら、貴族の紋章と称号に殉じて焚殺されてしまいたいという声もあった。すべてペリチョリに対して陰謀が企てられた。異端審問所ですら危惧して策を練ったらしい（Radiguet, 1986: 134–135）。

ペリチョリの暴走はそれらにとどまらない。貴人の乗る四輪馬車を贈っ

て貰い、リマ市中を闊歩したいとまで言い出すのである。ラディゲの本文を引こう。

> その結果、副王は不安を抱きながら、わがままな愛人と妥協せざるを得なかった。ペリチョリは喜んで妥協することにした。但し、華麗な四輪馬車をプレゼントしてもらい、その馬車に乗って晴れの儀式に出席できるという条件を出した。事が終わると、彼女は馬車を受け取り、晴れの日を迎えると贅沢さと美しさを誇りながら、貴族階級の面々の中を動いた。しかし、全く興奮が冷めやらぬ中で邸宅に戻る途中、街路の曲がり角で司祭に呼び止められた。その司祭は鈴に先導され行列に従われ、聖体拝領を行うべく重篤の人の宅に向かうところだった。移り気な彼女の心に突然ある決意が生ずる。馬車を自宅に返し、喪の列に加わって歩き、一緒になって瀕死の人の玄関先で跪く。慎ましやかな宗教的な姿で罪ある贅沢さと対照的な、彼女の姿だった。翌日馬車を教会に寄進し、聖体を運ぶのに役立ててもらった。御覧の通り、時々ペリチョリの心に湧いてくるキリスト教の感情が忽ち彼女の心に完璧に占めたに違いない。彼女は俄かに恩寵に触れたのだろうか。だが、世俗的な欲望に満ちた心にはまだ現役で長い期間舞台に立つことを必要としたのち、彼女はこれまでの栄光を捨て、修道院に隠棲して、罪ある弱さの果実である富を慈善事業に注いだ。こうした模範的な終末が彼女の生涯の過ちを和らげた。彼女は1812年、旧アラメダ街にある小さな家宅で死亡した。祝福されて皆が哀悼の意を表した。こうしてリマの住民に愛しい記憶を残したのである（Radiguet, 1856: 135–136）。

彼女は虚栄とは対極的な清貧の聖職者の姿に打たれ、副王からの贈り物を手放して教会に寄進した。舞台に復帰して富を蓄えたのち、神に仕える生活を送り、ペルーの独立戦争前夜の頃に亡くなった。しかし、彼女の記憶はペルー国民の間で不朽のものとなったことがわかる。

4.　リカルド・パルマと『ペルー伝説集』

4.1.　パルマの生涯と論敵プラダ

この章では、リカルド・パルマと彼の主著『ペルー伝説集』を扱う。彼は 1833 年、新生ペルー共和国の首都リマで生まれ、第一次大戦終了後の 1919 年リマ近郊の高級住宅地ミラフローレスで死去している。生涯を通じ、多彩な文人として新聞、エッセー、詩作、小説を多数書いている。1884 年にはペルー国立図書館長に任命された（Palma, 1986: xli）。実はその前、1879 年から 1884 年にかけて所謂「太平洋戦争」が起こった。その結果、チリがボリビアとペルーに対し開戦して勝利した。ボリビアは海の入り口を失った。また、ペルーは侵入してきたチリ軍に私設の図書館と国立図書館を焼かれたので、後者を再建するために欧州諸国を回って図書を補充するのに懸命になった。それで「物乞いの司書（ビブリオテカリオ・メンディゴ）」と呼ばれた（Palma, 1986: xli）。

パルマの思想や政治的姿勢を明らかにするには、ゴンサレス・プラダ（1848–1918）と比較すると良い。ともに 19 世紀の人物であるから、両者は自由主義者である。しかし、プラダはより急進主義的な自由主義者であり、進歩主義者でもあった。チリとの戦争で敗北したことが契機になって、彼はペルーの再建を構想した。すなわち、先住民文化の可能性の芽を摘んだのがスペインにあると見、先住民をペルー国家に取り込んでその可能性を開花させるべきとした。ただし、先住民を家父長的に人道的に保護することで開花させるのではなく、先住民自身が自ら覚醒していかねばならないと考えた（セア、2002、20–23 頁）。こうした点が強い個人を志向する自由主義者としての証左である。

プラダの過去に対する見方は次の通りである。スペインが統治した植民地時代を忌避し、その過去などはせいぜい現在の進歩ぶりを位置づけるだけの指標にすぎなかったとみなした。急進的自由主義者であったために、自由の名における自由の抑圧が目立った面があり、そこには寛容の余地が少なかったとも言えよう（Palma, 1986: 22）。

一方、パルマは穏健な自由主義者であり、時に保守主義者と呼ばれても

良い人物であった。過去にとくにスペイン時代に関する見方がプラダとは異なっていた。すなわち、良い過去は否定すべきものではないが、抑圧的な過去の場合は矯正すべきものと考えていた。自由主義を進めるが、時に柔軟に対応した人物である（Palma, 1986: 22）。そうした過去のふるい分けをするために、彼の『ペルー伝説集』があったと言えよう。ある意味この試みは、ドイツのグリムやロシアのアファナーシェフに比することができるかもしれない。

4.2. パルマによる醜聞の叙述

では、『ペルー伝説集』に移ろう。全 6 巻からなる伝説集は、1924 から 1925 年、1930 から 1939 年、1952 から 1954 年にかけて、スペインのエスパサ・カルペ社から発行されている。インカ時代、征服者の時代、植民地時代、独立期の挿話に溢れている。植民地時代の挿話の中には、リマの聖人サンタ・ロサやサン・マルティン・デ・ポレスが収められており、本稿のテーマであるペリチョリの挿話も収録されている。東京大学のアンデス発掘に参加した寺田和夫は、『アンデス教養旅行』を著しているが、「リマ周遊」と記された第 3 部でその伝説集に触れている（寺田、1962、138–157 頁）。サン・マルティン・デ・ポレスに加えて、ペリチョリに関するエッセーをものしている。その中で、ペリチョリの逸話がフランスの小説家メリメによって『サン・サクルマンの馬車』という戯曲になっていることをも指摘している。寺田は兄で仏文学者の寺田透を通じてその戯曲を知った可能性もある。

さて、本稿のテーマである、ペリチョリに目を通してみよう。それが書かれているのが、『ペリチョリの奇行』という表題の章である。舞台に立つまでは次のようになる。ペリチョリは本名がミカエラ・ビリェガスで、1739 年、ワヌコの地で貧しい両親の下から生まれ、5 歳の時に母親と共にリマに移住したようだ。教育はほとんど受けられなかったが、想像力に富んで記憶力も良く、アラルコンやローペ・デ・ベガの詩を吟じ、楽器も歌も良くしたので、1760 年初舞台を踏んだということだ（Palma, 1986: 159）。

今度は副王との出会いを次のようにまとめることができる。副王アマッ

トは 1762 年ペリチョリと知り合い、60 歳代であったにもかかわらず恋に落ちた。人目を憚らず、ペリチョリとリマ市中を往来した。週末にミラフローレスにある甥のアントニオ・アマット・ロカベルティ宅で過ごすときは、土曜日の午後副王宮から黄金の馬車で出かけ、行列を従えてペリチョリを馬で運ばせた。彼女は時に男の服装をしたり、金色に縁取りされた刺繍のある空色の贅沢なスカートと羽のついた帽子を被ったりすることもあったようだ（Palma, 1986: 160）。愛人に好き放題にさせていたのである。

アマットはリマの市民からの評判と実際とでは距離があった。それゆえ、市民からは、最も貪欲で、王国の富を最も平気でかすめる輩だの、パセオ・デ・アグアスのレンガ造りの建物にしても愛人のために作ったと言われる始末だったが、実際は公共事業を推進してリマ市域を拡大させた副王であったようだ（Palma, 1986: 160）。

二人の間にも終わりが来た。副王とペリチョリの仲が破綻したのは、劇場内での出来事であった。この言及は、パルマにしか見られない。その顛末は次の通りである。マサという男優がおり、彼は同時に舞台の興業主でもあってペリチョリを月に 150 ペセタで契約していた。今日ならリストリやラ・ピッティを雇うほどの高給だったようだ。しかし、マサはイネスという新人の女優に実入りの多くを渡していたので、ペリチョリは穏やかならない気持ちになっていた。カルデロン・バルカの喜劇をマサとペリチョリが演じた舞台でのこと、マサが劇中で、「女よ、もっと心を。イネスならもっとうまくやってのけるだろうから」と言うと、台詞であることも忘れて逆上し、手に持っていたタバコの火を彼の顔に押し付けた。幕が突然下り、観衆は騒然となって、「その女優を牢屋に入れよ」と激しくやじったという始末であった（Palma, 1986: 161）。

面子を潰されたのが副王だった。そこで、次のような記述になっている。副王は恥をかかされ、顔面がエビよりも赤くなり、その場を去った。夜も更けて静寂になった時、副王はお忍びで愛人宅に赴き、次のように語った。「恥をかかされた上は、私たちの関係はすべて終わった。お前が明日舞台に出て跪いて観客に許しを求めるようなことを私がさせないことに感謝すべきだ。さらば、ペリチョリよ」と言って粛々と去ったらしい

(Palma, 1986: 161–162)。

二人の間には隠し子がいた。その記述も落ちていない。すなわち、プエンテ・アマヤ通りにある家宅の中で、その胸部分にはアマットが属する聖ヘナロ騎士団の紋章が付いた贅を凝らした服を身につけているのがわかる。その子に向かって祖母がこう叫ぶ。「太陽にあたりなさんな。お前は庶民ではなく、高貴な人の息子だから」と記されている (Palma, 1986: 162)。

まだ後日談が続く。二人は 1775 年、9 月 17 日によりを取り戻した。しかし、副王は 76 年任を終えてペルーを去ることになった。その際、ロマンセが流布された。「愛人マヌエル・アマット氏がスペインに帰朝するに際して、ペリチョリの嘆きとため息」というものである。その中の謂いを引こう。「ジュピターたるあなた様が私の盾になってくれることを決めたミラフローレスはおろか、散策する道もなくなるでしょう」、「あなた様から賜った私の輝ける四輪馬車も墓石や霊廟の苦悩に役立ちますように」「私の愛の息子である愛しいアドニスよ、大いに泣け、そして一緒に泣きましょう」といった言い回しに満ちている (Palma, 1986: 163–164)。これもまた、パルマ以外は言及していない。

そのあと、本稿で扱ったラディゲの回想録やメリメの戯曲の言及があり、ペリチョリが四輪馬車を乗り回した挙句に教会に寄進した話をペルーの歴史家ラバーリェから引き、ヨーロッパ人の記事の些細な間違いを指摘している (Palma, 1986: 164)。この箇所はある意味、欧州からの視線を考慮しながら、ペルーの伝承をまとめているともいえよう。

最後の個所では二人のその後が記されている。アマットが帰任し、80 歳ながらも故郷のカタルーニャ地方で姪の一人と結婚し、一方ペリチョリは舞台生活を止めてカルメル修道会に入信し、清貧生活を送る。ラディゲを引用し、一切の富を修道会に捧げ、死去した時は皆の悲しみを誘って良き記憶を残した、と結んでいる (Palma, 1986: 165)。

パルマにおいては、ペリチョリの回心よりは醜聞そのものに関心があり、リマ市民の語り草になる詩歌を重視しているのである。

5.　まとめにかえて

フランスの映画監督ジャン・ルノワールは、第二次大戦中アメリカ合衆国に亡命して映画制作を継続した。戦後ヨーロッパに帰ると、フランスは一時的に立ち寄っただけで、イタリアのローマにあるチネチッタ撮影所で、1952 年『黄金の馬車』を制作した。もちろん、メリメの『サン・サクルマンの四輪馬車』を翻案した作品である。『大いなる幻影』の醸し出すイメージとは全く異なり、喜劇風の作品に仕上がり、しかも英語で作られている。フランス語、イタリア語の吹き替え版もある。フランスの批評家の多くからは非難囂々であったが、映画誌『カイエ・デュ・シネマ』の 1952 年 1 月号でトリュフォーの外、エリック・ロメールやジャック・リヴェットには評価された（Garson, 2007: 71）。

『黄金の馬車』は冒頭、ヴィヴァルディの「四季」のメロディーで始まるが、粗筋は次のようにまとめられる。舞台は同じく、18 世紀スペイン支配下のペルー副王領である。副王の下にスペインから黄金の馬車が到着する、同じ頃、イタリアからコメディア・デッラルテという喜劇役者の一座がやって来る。一座の芝居の主演女優がアンナ・マニャーニ演ずるカミラ（これがペリチョリ）に 3 人の男性が魅了される。役者の一人フェリペ、闘牛士のラモン、そして副王だった。3 人は恋のさや当てを行う。副王はカミラの歓心を買うため、届いたばかりの馬車を寄贈する。副王は恋敵二人を死刑に処することにしたが、他方、アウディエンシアや教会から弾劾されて更迭するのも時間の問題だった。一触即発のところで事態は急転直下する。カミラから馬車を寄進して貰った大司教が副王府を訪れ、この馬車が臨終の秘跡を行うのに役立つ馬車となろう、と発言し、騒動が終息した。一方、カミラの幸福は舞台の上にしかないことも明らかにされる（東宝、1991、4–5 頁）。これが映画の要約である。

以上からまとめると、副王アマットと女優ペリチョリの醜聞は、バジル・ホールの航海記を下敷きにしたメリメの戯曲作品で一挙に有名になった。同時にこの戯曲は秘かに、旧体制や教会に対する批判をも込めていた。その後、フランスの旅行者ラディゲは、実利的な旅行者の皮相な見方を批判し、より歴史的な雰囲気の残るペルーに着眼し、この醜聞を紹介し

ている。併せて、副王に対する女優の倒錯した心理、馬車を寄進し聖女に回心した姿をも記述している。そうしたヨーロッパの観察者による紹介を下敷きにした上でペルーのリカルド・パルマは、自国で保管されている史料をも用いて『ペルー伝説集』の中に収録している。旧副王領時期の史料を用いて、劇場の事件が二人の愛をどのように終わらせたか、それにまつわる詩作をも提示している点でより世俗的な愛情の側面を強く出しながら、植民地時代にある種、憧憬を忍ばせている。第二次世界大戦後にルノワールが制作した映画は、女優を巡る 3 人の男の争いに変えた喜劇になっているその一人が副王である。四輪馬車を寄進した点では、それまでの流れを踏まえている。今回はペルーの保守派が抱くイメージを扱った。今後はペルーの他のイメージを考究し、中南米の他地域を描く定型的なイメージの追求にまで拡大するのが次の課題であろう。

参考文献

セア、レオポルド（小林一宏、三橋利光訳）（2002）『現代ラテンアメリカ思想の先駆者たち』刀水書房

寺田和夫（1962）『アンデス教養旅行』東京大学出版会

東宝出版事業室編（1991）『ジャン・ルノワール監督作品：黄金の馬車』シャンテ・シネ 19 号、東宝出版事業室

メリメ、プロスペル（今日出海・斎藤慎二訳）（1939）「サン・サクルマンの四輪馬車」今日出海編『メリメ全集第 5 巻』、河出書房、1–60 頁

メリメ、プロスペル（江口清訳）（1979）「ドン・ペドロ 1 世伝」江口清編『プロスペル・メリメ第 4 巻』、河出書房新社、5–352 頁

山田宏一・蓮実重彦（1996）『ジャン・ルノワール、映画のすべて』、国立近代美術館フィルムセンター

Fisher, J. R.（1970）*Government and Society in Colonial Peru: The Intendant System 1784–1814*. London: Athlone Press.

Garson, C.（2007）*Jean Renoir*. Paris: Le Monde.

Hainsworth, G.（1972）“Autour du *Carrosse du Saint-Sacrement*: Basil Hall, *La Araucana* et *I'Histoire Générale des Voyages*,” *Zeitschrift für Sprache und Literatur*, Bd. 82, H. 2, pp. 141–152.

Hall, B.（1824）*Extracts from a journal, written on the coasts of Chili, Peru, and Mexico, in the years 1820, 1821, 1822*. Vol. 1. Edinburg: A. Constable.

Meier, H.（1940）“Mérimée Interpretationen: I. Le Carrosse du Saint-Sacrement,”

Romanische Forschungen, Bd. 54, H. 3, pp. 412–424.

Mérimée, P.（1978）*Théatre de Clara Gazul. Romans et Nouvelles*. Paris: Gallimard.

Mérimée, P.（1928）*Théatre de Clara Gazul comédienne espagnole suivi de La Famille de Carvajal*. Paris: Garnier Frères

Palma, R.（1961）*Tradiciones Peruanas*. Tomo II. Madrid: Espasa-Calpe.

Palma, R.（1986）*Tradiciones Peruanas*. México: Editorial Porrúa.

Palma, R.（1994）*Tradiciones Peruanas*. Madrid: Cátedra.

Palma, R.（1996）*Tradiciones Peruanas*. Chile: Editorial Universitaria.

Päpßler, U. & T. Schumuck（hrsg.）（2015）*Alexander von Humboldt Jean-Baptiste Boussingault Briefwechsel*. Berlin: De Gruyter.

Radiguet, M.（1856）*Souvenirs de l'Amérique espagnole: Chili, Pérou, Brésil*. Paris: Michel-Lévy Frères.

Narboni, J., J. Bazin et C. Gauteur（2005）*Jean Renoir: entretiens et propos*. Paris: Cahiers du Cinéma.